病院の窓

石川啄木

野村良吉は平日（いつも）より少し早目に外交から帰つた。二月の中旬過（なかばすぎ）の、珍らしく寒さの緩んだ日で、街々の雪がザクザク融けかかつて来たから、指先に穴のあいた足袋が気持悪く濡れて居た。事務室に入つて、受付の広田に聞くと、同じ外勤の上島（うはしま）も長野も未だ帰つて来ないと云ふ。時計は一時十六分を示して居た。

暫時（しばらく）其処の暖炉（ストーブ）にあたつて、濡れた足袋を赤くなつて燃えて居る暖炉（ストーブ）に自暴（やけ）に擦（こす）り付けると、シユッシユッと厭な音がして、変な臭気（にほひ）が鼻を撲（う）つ。苦い顔をして階段（はしご）を上（あが）つて、懐手をした儘耳を欹（そばだ）てて見たが、森閑として居る。右の手を出して、垢着いた毛糸の首

巻と毛羅紗（けラシャ）の鳥打（とりうち）帽を打釘に懸けて、其手で扉（ドア）を開けて急がしく編輯局を見廻した。一月程前に来た竹山と云ふ編輯主任は、種々（いろいろ）の新聞を取散らかした中で頻（しき）りに何か書いて居る。主筆は例の如く少し曲つた広い背を此方（こつち）に向けて、暖炉（ストーブ）の傍（わき）の窓際で新着の雑誌らしいものを読んで居る。「何も話して居なかつたナ。」と思ふと、野村は少し安堵した。今朝出社した時、此二人が何か密々（ひそひそ）話合つて居て、自分が入ると急に止めた。――それが少なからず渠（かれ）の心を悩ませて居たのだ。役所廻りをして、此間（こなひだ）やつた臨時種痘の成績調やら辞令やらを写して居ながらも、四六時中（しよつちゆう）それが気になつて、

「何の話だらう？　俺の事だ、屹度俺の事に違ひない。」
などと許り考へて居た。

　ホツと安堵すると妙な笑が顔に浮んだ。一足入つて、扉(ドア)を閉めて、

『今日は余程(よつぽど)道が融けましたねす。』

と、国訛りの、ザラザラした声で云つて、心持頭を下げると、竹山は

『早かつたですナ。』

『ハア、今日は何も珍らしい材料(たね)がありませんでした。』

と云ひ乍ら、野村は暖炉の側(わき)にあつた椅子を引ずつて

来て腰を下した。古新聞を取つて性急（そそくさ）に机の塵を払つたが、硯箱の蓋をとると、誰が使つたのか墨が磨（す）れて居る。「誰だらう？」と思ふと、何だか訳もなしに不愉快に感じられた。立つて行つて、片隅の本箱の上に積んだ原稿紙を五六十枚攫（つか）んで来て、懐から手帳を出して手早く頁を繰つて見たが、これぞと気乗（きのり）のする材料も無かつたので、「不漁（ふれふ）だ、不漁だ。」と呟いて机の上に放り出した。頭がまたクサクサし出す様な気がする。両の袂を探つたが煙草が一本も残つて居ない。野村は顔を曇らせて、磨れて居る墨を更に磨り出した。

　編輯局は左程広くもないが、西と南に二つ宛の窓、

新築した許りの社なので、室の中が気持よく明るい。五尺に七尺程の粗末な椴松（とどまつ）の大机が据ゑてある南の窓には、午後一時過の日射（ひざし）が硝子の塵を白く染めて、机の上には東京やら札幌小樽やらの新聞が幾枚も幾枚も拡げたなりに散らかつて居て、恰度野村の前にある赤インキの大きな汚染（しみ）が、新らしい机だけに、胸が苛々する程血腥（ちなまぐさ）い厭な色に見える。主筆は別に一脚の塗机を西の左の窓際に据ゑて居た。

　此新聞は、昔貧小（ちつぽけ）な週刊であつた頃から、釧路の町と共に発達して来た長い歴史を持つて居て、今では千九百何号かに達して居る。誰やらが「新聞界の桃源」

と評しただけあつて、主筆と上島と野村と、唯三人でやつて居た頃は随分暢気(のんき)なものであつたが、遠からず紙面やら販路やらを拡張すると云ふので、社屋の新築と共に竹山主任が来た。一週間許り以前に長野と云ふ男が助手といふ名で入社(はひ)つた。竹山が来ると同時に社内の空気も紙面の体裁も一新されて、野村も上島も怠ける訳にいかなくなつた。

　野村は四年程以前に竹山を知つて居た。其竹山が来ると聞いた時、アノ男が何故恁麼(こんな)釧路あたりまで来るのかと驚いた。と同時に、云ふに云はれぬ不安が起つて、口には出さなかつたが、悪い奴が来る事になつた

もんだと思つて居た。野村は、仮令(たとへ)甚麼(どんな)に自分に好意を持つてる人にしても、自分の過去を知つた者には顔を見られたくない経歴を持つて居た。けれども、初めて逢つた時は流石に懐しく嬉しく感じた。

野村の聞知つた所では、此社の社長の代議士が、怎(どう)した事情の下にか知れぬけれど、或実業家から金を出さして、去年の秋小樽に新聞を起した。急造(にはかづくり)の新聞だから種々(いろん)な者が集まつたので、一月経つか経たぬに社内に紛擾(さわぎ)が持上つた。社長は何方(どつち)かと云へば因循な人であるけれど、資本主(ぬし)から迫られて、社の創業費を六百円近く着服(ちよろまか)したと云ふ主筆初め二三の者を追出

して了つた。と、怎したのか知らぬが他の者まで動き出して、編輯局に唯一人残つた。それは竹山であつたさうな。竹山は其時一週間許りも唯一人で新聞を出して見せたのが、社長に重んぜられる原因になつて、二度目の主筆が兎角竹山を邪魔にし出した時は、自分一人の為に折角の社を騒がすのは本意で無いと云つて、誰が留めても応かずに遂々退社の辞を草した。幸ひ此方の社が拡張の機運に際して居たので、社長は随分と破格な自由と待遇を与へて竹山を併れて来たのだと云ふ事であつた。打見には二十七八に見える老けた所があるけれど、実際は漸々二十三だと云ふ事で、髯が

一本も無く、烈しい気象が眼に輝いて、少年(こども)らしい活気の溢れた、何処か恁(か)うナポレオンの肖像画に肖通つた所のある顔立で、愛想一つ云はぬけれど、口元に絶やさぬ微笑に誰でも人好(ひとずき)がする。一段二段の長い記事を字一つ消すでなく、スラスラと淀みなく綺麗な原稿を書くので、文選小僧が先づ一番先に竹山を讃めた。社長が珍重してるだけに恐ろしく筆の立つ男で、野村もそれを認めぬではないが、年が上な故(せゐ)か怎(どう)しても心から竹山に服する気にはなれぬ。酒を喰(くら)つた時などは気が大きくなつて、思切つて竹山の蔭口を叩く事もある位で、殊に此男が馴々しく話をする時は、昔の事——

—強ひて自分で忘れて居る昔の事を云ひ出されるかと、それは〳〵人知れぬ苦労をして居た。

野村は力が抜けた様に墨を磨つて居たが、眼は凝然(ぢつ)と竹山の筆の走るのを見た儘、種々(いろん)な事が胸の中に急がしく往来して居て、さらでだに不気味な顔が一層険悪になつて居た。竹山も主筆も恰(あたか)も知らぬ人同志が同じ汽車に乗り合した様に、互にそ知らぬ態(さま)をして居る。何方(どつち)も傍に人が居ぬかの様に、見向くでもなければ一語を交すでもない。渠(かれ)は此態(このさま)を見て又候(またぞろ)不安を感じ出して来た。屹度俺の来るまでは二人で何か——俺の事を話して居たに違ひない。恁(か)うと、今朝俺の

出社したのは九時半……否(いや)十時頃だつたが、それから三時間余も恁う黙つて居ると云ふ事はない。屹度話して居たのだ。不図すると俺の来る直(ぢ)き前まで……或は其時既に話が決つて了つて、恰度其処へ俺が入つたのぢやないか知ら。と、上島にも長野にも硯箱があるのに、俺ンのを使つたのは誰であらう。然うだ、此椅子も暖炉の所へ行つて居た。アレは社長の癖だ。社長が来たに違ひない。先刻(さつき)事務の広田に聞いて呉れば可(よ)かつたのにと考へたが、若しかすると、二人で相談して居た所へ社長が来て、三人になつて三人で俺の事を色々悪口し合つて、……然(さ)うだ、此事を云ひ出したの

は竹山に違ひない。上島と云ふ奴酷い男だ。以前は俺と毎晩飲んで歩いた癖に、此頃は馬鹿に竹山の宿へ行く。行つて俺の事を喋つたに違ひない。好し、そんなら俺も彼奴(あいつ)の事を素破抜(すつぱぬ)いてやらう、と気が立つて来て、卑怯な奴等だ、何も然う狐鼠々々(こそこそ)相談せずと、退社しろなら退社しろと瞭(きつぱ)り云つたら可いぢやないか、と自暴糞(やけくそ)な考へを起して見たが、退社といふ辞(ことば)が我ながらムカムカしてる胸に冷水(ひやみづ)を浴せた様に心に響いた。飢餓(うゑ)と恐怖(おそれ)と困憊(つかれ)と悔恨(くい)と……真暗な洞穴(ほらあな)の中を真黒な衣を着てゾロゾロと行く乞食の群！　野村は目を瞑(つぶ)つた。

白く波立つ海の中から、檣が二本出て居る様が見える。去年の秋、渠が初めて此釧路に来たのは、丁度竹の浦丸といふ汽船が、怎した錯誤からか港内に碇泊した儘沈没した時で、二本の檣だけが波の上に現はれて居た。風の寒い浜辺を、飢ゑて疲れて、古袷一枚で彷徨き乍ら、其檣を眺むるともなく眺めて「破船」といふことを考へた。そして渠は、濡れた巌に突伏して声を出して泣いた事があつた。……野村は一層堅く目を瞑つた。と、矢張其時の事、子供を伴れた夫婦者の乞食と一緒に、三晩続けて知人岬の或神社に寝た事を思出した。キイと云ふ子供の夜泣の声。垢だらけの

胸を抜《はだ》けて乳をやる母親は、鼻が推潰《おしつぶ》した［＃「推潰《おしつぶ》した」は底本では「推潰《おしつぶ》した」］様で、土に染みた髪は異な臭気を放つて居たが、……噫、浅間しいもんだ、那麼《あんな》時でも那麼気を、と思ふと其夫《をつと》の、見るからに物凄い髭面が目に浮ぶ。心は直ぐ飛んで、遠い遠い小坂の鉱山へ行つた。物凄い髭面許りの坑夫に交つて、十日許りも坑道《しき》の中で鉱車《トロツコ》を推した事があつた。真黒な穴の口が見える。それは昇降機《エレヴエーター》を仕懸けた縦坑であつた。噫、俺はアノ穴を見る恐怖《おそろしさ》に耐へきれなくなつて、坑道の入口から少し上の、些《ちつ》と許り草があつて女郎花《をみなへし》の咲いた所に半日寝転んだ。母、生みの母、上衝《のぼせ》で眼を

悪くしてる母が、アノ時甚麽(どんな)に恋しくなつかしく思はれたらう！　母の額に大きな痍(きず)があつた。然うだ、父親(おやぢ)が酔払つて丼を投げた時、母は左の手で……血だらけになつた母の顔が目の前に……。

ハツとして目を開(あ)いた野村は、微かな動悸を胸に覚えて、墨磨る手が動かなくなつて居た。母！　と云ふ考へが又浮ぶ。母が親(みづか)ら書く平仮名の、然も、二度三度繰返して推諒しなければ解らぬ手紙！　此間(こなひだ)返事をやつた時は、馬鹿に景気の可(い)い様な事を書いた。景気の可い様な事を書いてやつて安心さしたのに、と思つて四辺(あたり)を見た。竹山は筆の軸で軽く机を敲き乍ら、書

きさしの原稿を睨んで居る。不図したら今日締切後に宣告するかも知れぬ、と云ふ疑ひが電(いなづま)の様に心を刺した。其顔面には例の痙攣(ひきつけ)が起つてピクピク顫へて居た。

内心の断間(たえま)なき不安を表はすかの様に、ピクピク顔の肉を痙攣(ひきつ)けさせて居るのは渠(かれ)の癖であつた。色のドス黒い、光沢(つや)の消えた顔は、何方かと云へば輪廓の正しい、醜くない方であるけれども、硝子玉の様にギラギラ悪光りのする大きい眼と、キリリと結ばれる事のない唇(くちびる)とが、顔全体の調和を破つて、初めて逢つた時は前科者ぢやないかと思つたと主筆の云つた如く、

何様（なにさま）物凄く不気味に見える。少し前に屈（こご）んだ中背の、齢は二十九で、髯は殆んど生えないが、六七本許りも真黒なのが頤（おとがひ）に生えて五分位に延びてる時は、其人相を一層険悪にした。

　渠が其地位に対する不安を抱き始めたのは遂（つひ）此頃の事で、以前（もと）郵便局に監視人とかを務めたといふ、主筆と同国生れの長野が、編輯助手として入つた日からであつた。今迄上島と二人で隔日に校正をやつて居た所へ、校正を一人入れるといふ竹山の話は嬉しかつたものの、逢つて見ると長野は三十の上を二つ三つ越した、牛の様な身体の、牛の様な顔をした、随分と不格好で

気の利かない男であつたが、「私は木下さん（主筆）と同国の者で厶いまして、」と云ふ挨拶を聞いた時、俺よりも確かな伝手があると思つて、先づ不快を催した。自分が唯十五円なのに、長野の服装の自分より立派なのは、若しや俺より高く雇つたのぢやないかと云ふ疑ひを惹起したが、それは翌日になつて十三円だと知れて安堵した。が、三日目から今迄野村の分担だつた商況の材料取と警察廻りは長野に歩かせる事になつた。竹山は、「一日も早く新聞の仕事に慣れる様に、」と云つて、自分より二倍も身体の大きい長野を、手酷しく小言を云つては毎日々々使役ふ。校正係なら校正だけ

で沢山だと野村は思つた。加之(のみならず)、渠は恁麼(こんな)釧路の様な狭い所では、外交は上島と自分と二人で充分だと考へて居た。時々何も材料が無かつたと云つて、遠い所は廻らずに来る癖に。

浮世の戦ひに疲れて、一刻と雖ども安心と云ふ気持を抱いた事の無い野村は、適切(てつきり)長野を入れたのは自分を退社させる準備だと推諒した。と云ふのは、自分が時々善からぬ事をしてゐるのを、渠自身さへ稀(たま)には思返して浅間しいと思つて居たので。

渠は漸々(やうやう)筆を執上げて、其処此処手帳を翻反(ひつくらか)へして見てから、二三行書き出した。そして又手帳を見て、

書いた所を読返したが、急がしく墨を塗つて、手の中に丸めて机の下に投げた。又書いて又消した。同じ事を三度続けると、何かしら鈍い圧迫が頭脳（あたま）に起つて来て、四辺（あたり）が明るいのに自分だけ陰気な所に居る様な気がする。これも平日（いつも）の癖で、頭を右左に少し振つて見たが、重くもなければ痛くもない。二三度やつて見ても矢張同じ事だ。が、今にも頭が堪へ難い程重くなつてズクズク疼（うづ）き出す様な気がして、渠は痛くもならぬ中から顔を顰蹙（しか）めた。そして、下唇を噛み乍らまた書出した。

『支庁長が居つたかえ、野村君？』

と、突然(だしぬけ)に主筆の声が耳に入つた。

『ハア、支庁長ですか？　ハア居まし……一番で行きました。』

『今朝の一番汽車か？』

『ハア、札幌の道庁へ行きましたねす。』と急がしく手帳を見て、『一番で立ちました。』

『札幌は解つてるが、……戸川課長は居るだらう？』

『ハア居ります。』

野村は我乍ら滑稽(をかし)い程狼狽(うろた)へたと思ふと、赫(かつ)と血が上つて顔が熱(ほと)り出して、沢山の人が自分の後に立つて笑つてる様な気がするので、自暴(やけ)に乱暴な字を、五六

行息つかずに書いた。

『ぢや君、先刻(さつき)の話を一応戸川に打合せて来るから。』と竹山に云つて、主筆は室を出て行つた。「先刻の話」と云ふ語(ことば)は熱して居る野村の頭にも明瞭(はつきり)と聞えた。支庁の戸川に打合せる話なら俺の事ぢやない。ハテそれでは何の事だらうと頭を挙げたが、何故か心が臆して竹山に聞きもしなかつた。

『君は大変顔色が悪いぢやないか。』と竹山が云つた。

『ハア、怎(どう)も頭が痛くツて。』と云つて、野村は筆を擱(お)いて立つ。

『そらア良くない。』

『書いてると頭がグルグルして来ましてねす。』と暖炉の方へ歩き出した。大袈裟に顔を顰蹙(しか)めて右の手で後脳を抑へて見せた。

『風邪でも引いたんぢやないですか？』と鷹揚に云ひ乍ら、竹山は煙草に火をつける。

『風邪かも知れませんが、……先刻支庁から出て坂を下りる時も、妙に悪寒(さむけ)がしましてねす。余程(よつぽど)温(ぬく)い日ですけれどもねす。』と云つたが、竹山の鼻から出て頤の辺まで下つて、更に頬を撫でて昇つて行く柔かな煙を見ると、モウ耐らなくなつて『何卒(どうぞ)一本。』と竹山の煙草を取つた。『咽喉も少し変だどもねす。』

『そらア良くない。大事にし給へな。何なら君、今日の材料(たね)は話して貰つて僕が書いても可いです。』

『ハア、些(ちつ)と許りですから。』

込絡(こんがら)かつた足音が聞えて、上島と長野が連立つて入つて来た。上島は平日(いつ)にない元気で、

『愈々漁業組合が出来る事になつて、明日有志者の協議会を開くさうですな。』

と云ひ乍ら、直ぐ墨を磨り出した。

『先刻(さつき)社長が見えて其麼(そんな)事を云つて居た。二号標題(みだし)で成るべく景気をつけて書いて呉れ給へ。尤も、今日は単に報道に止(とど)めて、此方(こつち)の意見は二三日待つて見て下

さい。』
長野が牛の様な身体を殷懃（いんぎん）［＃「殷懃（いんぎん）」はママ］に運んで机の前に出て、
『アノ商況で厶（ござ）いますな。』と揉手をする。
『ハ、野村君は今日頭痛がするさうだから僕が聞いて書きませう。』
『イヤソノ、今日は何にも材料がありませんので。』
『材料が無いツて、昨日と何も異動がないといふのかね？』
『え、異動がありませんでした。』
『越後米を積んで、雲海丸の入港（はひ）つたのは、昨日（きのふ）だつ

たか一昨日（おととひ）だつたか、野村君？』と竹山が云つた。長野が慣れるうち、取つて来た材料を話して野村が商況——と云つても小さい町だから十行二十行位のものだが——を書く事にしてあつたのだ。

『ハア、昨日の朝ですから、原田の店あたりでは輸出の豆粕が大分手打になつたらうと思ひますがねす。』

『遂（つひ）聞きませんでしたな。』と云つて、長野はきまり悪げに先づ野村を見た目を竹山に移した。

『警察の方は？』

『違警罪が唯一（たつた）一つムいました。今書いて差上げます。』と硯箱の蓋をとる。

野村は眉間に深い皺を寄せて、其癖美味(うま)さうに煙草を吸つて居たが、時々頭を振つて見るけれど、些(ちつ)とも重くもなければ痛くもない。咽喉にも何の変りがなかつた。軈(やが)てまた机に就いて、成るべく厭に見える様に顔を顰蹙(しか)めたり後脳を抑へて見たりし乍ら、手帳を繰り初めたが、不図髯を捻つて居る戸川課長の顔を思出した。課長は今日俺の顔を見るとから笑つて居て、何かの話の序(ついで)にアノ事――三四日前に共立病院の看護婦に催眠術を施(か)けた事を揶揄(からか)つた。課長は無論唯若い看護婦に施(か)けたと云ふだけで揶揄つたので、実際又医者や薬剤師や他(ほか)の看護婦の居た前で施(か)けたのだから、

何も訝(をか)しい事が無い。無いには無いが、若しアノ時アノ暗示を与へたら怎であつたらう、と思ふと、其梅野といふ看護婦がスツカリ眠つて了つて、横に臥(たふ)れた時、白い職服(きもの)の下から赤いものが喰(は)み出して、其の下から円く肥つた真白い脛の出たのが眼に浮んだ。渠は擽(くす)ぐられる様な気がして、俯(うつむ)いた儘変な笑を浮べて居た。

上島は燐寸を擦つて煙草を吹かし出した。と、渠はまたもや喉から手が出る程喫みたくなつて、『君は何日(いつ)でも煙草を持つてるな。』と云ひ乍ら一本取つた。何故今日はアノ娘が居なかつたらう、と考へる。それは洲崎町のトある角の、渠が何日でも寄る煙草屋の事

で、モウ大分借が溜つてるから、すぐ顔を赤くする銀杏返し（いちやうがへし）の娘が店に居れば格別、口喧（くちやかま）しやの老母（ばばあ）が居た日には怎（どう）しても貸して呉れぬ。今日何故娘が居なかつたらう？　俺が行くと娘は何日でも俯いて了ふが、恥かしいのだ、屹度恥かしいのだと思ふと、それにしても其娘が寄席で頻りに煎餅を喰べ乍ら落語を聞いて居た事を思出す。頭に被さつた鈍い圧迫が何時しか跡なく剝げて了つて、心は上の空、野村は眉間の皺を努めて深くし乍ら、それからそれと町の女の事を胸に数へて居た。

兎角して渠は漸々（やうやう）三十行許り書いた。大儀さうに立

上つて、その原稿を主任の前に出す時、我乍ら余り汚く書いたと思つた。

『目が眩む様なもんですから滅茶々々で、……』

『否（いや）、有難う。』と竹山は例（いつ）になく礼を云つたが、平日（いつも）の癖で直ぐには原稿に目もくれぬ。渠も亦平日（いつも）の癖でそれを一寸不快に思つたが、

『あとは別に書く様な事もありませんが。』と竹山の顔色を見る。

『怎（どう）も御苦労。何なら家（うち）へ帰つて一つ汗でも取つて見給へ。大事にせんと良くないから。』

『ハア、それぢや今日だけ御免蒙りますからねす。』と

云って、出来るだけ元気の無い様に皆に挨拶して、編輯局を出た。眼をギラギラ光らして舌を出し乍ら、垢づいた首巻を巻いて居たが、階段(はしご)を降りる時は再(また)顔を顰蹙(しか)めて、些(ちよい)と時計を見上げたなり、事務の人々には言葉もかけず戸外(そと)へ出て了つた。と、鈍い歩調(あしどり)で二三十歩、俛首(うなだ)れて歩いて居たが、四角(よつかど)を右に曲って、振顧(ふりかへ)ってもモウ社が見えない所に来ると、渠は遽(には)かに顔を上げて、融けかかったザクザクの雪を蹴散し乍ら、勢ひよく足を急がせて、二町の先に二階の見ゆる共立病院へ…………。

解雇される心配も、血だらけな母の顔も、鈍い圧迫

と共に消えて了つて、勝誇つた様な腥(なまぐさ)い笑が其顔に漲つて居た。

四年以前、野村が初めて竹山を知つたのは、まだ東京に居た時分の事で、其頃渠は駿河台のトある竹藪の崖に臨んだ、可成な下宿屋の離室(はなれ)に居た。

今でも記憶(おぼ)えて居る人があるか知れぬが、其頃竹山は郷里に居ながら、毎月二種か三種の東京の雑誌に詩を出して居て、若々しい感情を拘束もなく華やかな語に聯(つら)ねた其詩――云ふ迄もなく、稚気と模倣に富んで

は居たが、当時の詩壇ではそれでも人の目を引いて、同じ道の人の間には、此年少詩人の前途に大きな星が光つてる様に思ふ人もあつた。竹山自身も亦、押へきれぬ若い憧憬(あこがれ)に胸を唆(そその)かされて、十九の秋に東京へ出た。渠が初めて選んだ宿は、かの竹藪の崖に臨んだ駿河台の下宿であつた。

　某新聞の文界片信は、詩人竹山静雨が上京して駿河台に居をトしたが近々其第一詩集を編輯するさうだと報じた。

　此新聞が縁になつて、野村は或日同県出の竹山が自分と同じ宿に居る事を知つた。で、渠は早速名刺を女

中に持たしてやつて、竹山に交際を求めた。最初の会見は、縁側近く四つ五つ実を持つた橙（だいだい）の樹のある、竹山の室で遂げられた。

野村は或学校で支那語を修めたと云ふ事であつた。其頃も神田のさる私塾で支那語の教師をして居て、よく、皺（しわ）くちやになつたフロツクコートを、朝から晩まで着て居た。外出（でかけ）る時は屹度中山高（ちゆうやまたか）を冠つて、象牙の犬の頭のついた洋杖（ステツキ）を、大輪に振つて歩くのが癖。

其頃、一体が不気味な顔であるけれども、まだ前科者に見せる程でもなく、ギラギラする眼にも若い光が残つて居て、言語（ことば）も今の様にぞんざいでなく、国訛り

の「ねす」を語尾につける事も無かつた。

半月計りして其下宿屋は潰れた。公然（おもてむき）の営業は罷（や）めて、牛込は神楽坂裏の、或る閑静な所に移つて素人下宿をやるといふ事になつて、五十人近い止宿人（おきやく）の中、願はれて、又願つて、一緒に移つたのが八人あつた。野村も竹山もその中に居た。

野村は其頃頻りに催眠術に熱中して居て、何とか云ふ有名な術者に二ケ月もついて習つたとさへ云つて居た。竹山も時々其不思議な実験を見せられた。或時は其為に野村に対して一種の恐怖を抱いた事もあつた。渠は又、或教会に籍を置く基督信者（クリスチヤン）で、新教を奉じ

て居ながらも、時々は旧教の方が詩的で可いと云つて居た。竹山は、無論渠を真摯な信仰のある人とも思はなかつたが、それでも机の上には常に讃美歌の本が載つて居て、（歌ふのは一度も聞かなかつたが）、皺くちやのフロツクコートには、小形の聖書（バイブル）が何日でも衣嚢（ポケツト）に入れてあつた。同じ教会の信者だといふハイカラな女学生が四五人、時々野村を訪ねて来た。其中の一人、脊の低い、鼻まで覆被（おつかぶ）さる程庇髪（ひさしがみ）をつき出したのが、或時朝早く野村の室から出て便所（はばかり）へ行つた。「信者たる所以（ゆゑん）は彼処だ！」と竹山は考へた事があつた。

渠は又、時々短かい七五調の詩を作つて竹山に見せ

た。讃美歌まがひの、些（ちつ）とも新らしい所のないものであつたが、それでも時として、一句二句、錐の様に胸を刺す所があつた。韻文には適（む）かぬから小説を書いて見ようと思ふと云ふのが渠（かれ）の癖で、或時其書かうとして居る小説の結構を竹山に話した事があつた。題も梗概も忘れて了つたが、肉と霊と、実際と理想と、其四辻に立つて居る男だから、主人公の名は辻 某（なにがし）とすると云つた事だけ竹山は記憶して居た。無論此小説は、渠の胸の中で書かれて、胸の中で出版されて、胸の中で非常な好評を博して、遂々（たうたう）胸の中で忘られたのだ。

一体が、机の前に坐る事のない男であつた。

小説に書かうとした許りでなく、其詩に好んで題材とし、又其真摯なる時によく話題に選ぶのは、常に「肉と霊の争闘（あらそひ）」と云ふ事であつた。肉と霊！　渠は何日でも次の様な事を云つて居た。曰く、「最初の二人が罪を得て楽園を追放（やらは）れた為に、人間が苦痛（くるしみ）の郷（さと）、涙の谷に住むと云ふのは可いが、そんなら何故神は、人間をして更に幾多の罪悪を犯さしめる機関、即ち肉と云ふものを人間に与へたのだらう？」又或時渠は、不意に竹山の室の障子を開けて、恐ろしいものに襲はれた様に、凄（すさまじ）い位眼を光らして、顔一体を波立つ程苛々（いらいら）させ乍ら、「肉の叫び！　肉の叫び！」と云つて入つて

来た事があつた。其頃の渠の顔は、今の様に四六時中(しよつちう)痙攣(ひきつけ)を起してる事は稀であつた。

渠は大抵の時は煙草代にも窮してる様であつた。が、時として非常な贅沢をした。日曜に教会へ行くと云つて出て行つて、夜になるとグデングデンに酔払つて帰る事もあつた。

竹山は毎日の様に野村と顔を合せて居たに不拘、怎したものか余り親しくはなかつた。却つて、駿河台では野村と同じ室に居て、牛込へは時々遊びに来た渠の従弟といふ青年に心を許して居たが、其青年は、頗る率直な、真摯な、冒険心に富んで、何日でもニコニコ

笑ってる男であつたけれど、談一度（ひとたび）野村の事に移ると、急に顔を曇らせて、「従兄には弱つて了ひます。」と云つて居た。

渠は又時々、郷里（くに）にある自分の財産を親類が怎（どう）とかしたと云つて、其訴訟の手続を同宿の法学生に訊いて居た事があつた。それから、或時宿の女中の十二位なのに催眠術を施（か）けて、自分の室に閉鎖（とぢこ）めて、半時間許りも何か小声で頻（しき）りに訊ねて居た事があつた。隣室の人の洩れ聞いたんでは、何でも其財産問題に関した事であつたさうな。渠は平生、催眠術によつて過去の事は勿論、未来の事も予言させる事が出来ると云つて居

た。

竹山の親しく見た野村良吉は、大略前述の様なものであつたが、渠は同宿の人の間に頗る不信用であつた。野村は女学生を蘯して弄んで、おまけに金を捲上げて居るとか、牧師の細君と怪しい関係を結んでるさうだとか、好からぬ噂のみ多い中に、お定と云つて豊橋在から来た、些と美しい女中が時々渠の室に泊るという事と、宿の主婦——三十二三で、細面の、眼の表情の満干の烈しい、甚麼急がしい日でも髪をテカテカさして居る主婦と、余程前から通じて居るといふ事は、人々の間に殆んど確信されて居た。それから、其お定とい

ふのが、或朝竹山の室の掃除に来て居て、二つ三つの戯談を云つてから、恁麼（こんな）話をした事があつた。

『野村さんて、余程面白い方ねえ。』

『怎（どう）して？』

『怎してツて、オホヽヽ。』

『可笑しい事があるもんか？』

『あのね、……駿河台に居る頃は随分だつたわ。』

『何が？』

『何がツて、時々淫売婦なんか伴れ込んで泊めたのよ。』

『其麼（そんな）事をしたのか、野村君は？』

『黙つてらつしやいよ、貴方。』と云つたが、『だけど、云つちや悪いわね。』

『マア云つて見るさ。口出しをして止すツて事があるもんか。』

『何日だつたか、あの方が九時頃に酔払つて帰つたのよ、お竹さんて人伴れて。え、其人は其時初めてよ。それも可いけど、突然(いきなり)、一緒に居た政男さん（従弟）に怒鳴りつけるんですもの、政男さんだつて怒りますわねえ。恰度空いた室があつたから、其晩だけ政男さんは其方へお寝(やす)みになつたんですけど、朝になつたら面白いのよ。』

『馬鹿な、怎したい？』

『野村さんがお金を出したら、要(い)らないつて云ふんですつて、其お竹さんと云ふ人が。そしたらね、それぢや再(また)来いツて其儘帰したんですとさ。』

『可笑しくもないぢやないか。』

『マお聞きなさいよ。そしたら其晩再(また)来ましたの。野村さんは洋服なんか着込んでらつしやるから、見込をつけたらしいのよ。私其時取次に出たから明細(すつかり)見てやつたんですが、これ（と頭に手をやつて、）よりもモツト前髪を大きく取つた銀杏返しに結つて、衣服(きもの)は洗晒しだつたけど、可愛い顔してたのよ。尤も少し青かつ

たけど。』

『酷い奴だ。また泊めたのか？』

『黙つてらつしやいよ、貴方。そしたら野村さんが、鎌倉へ行つたから二三日帰らないツて云へと云ふんでせう。私可笑しくなつたから黙つて上げてやらうかと思つたんですけどね。呍咐（いひつか）つた通り云ふと、穏（おとな）しく帰つたのよ。それからお主婦さんと私と二人で散々揄揶（からか）つてやつたら、マア野村さん酷い事云つたの。』と竹山の顔を見たが、『あの女は息が臭いから駄目なんですツて。』と云ふなり、畳に突伏して転げ歩いて笑つた。

牛込に移つてから二月許り後の事、恰度師走上旬であつたが、野村は小石川の何とか云ふ町の坂の下の家とかを、月十五円の家賃で借りて、「東京心理療院」と云ふ看板を出した。そして催眠術療法の効能を述立(のべた)てた印刷物(すりもの)を二千枚とか市中に撒いたさうな。其後二度許り竹山を訪ねて来たが、一度はモウ節季近い凩(こがらし)の吹き荒れて、灰色の雲が低く軒を掠めて飛ぶ不快な日で、野村は「患者が一人も来ない。」と云つて悄気(しよげ)返つて居た。其日は服装(なり)も見すぼらしかつたし、云ふ事も「清い」とか「美しい」とか云ふ詞(ことば)沢山の、神経質な厭世詩人みたいな事許りであつたが、珍らしくも小半

日落着いて話した末、一緒に夕飯を食つて、帰りに些(ち)と許りの借りた金の申訳をして行つた。一番最後に来たのは、年が新らしくなつた四日目か五日目の事で、呂律(ろれつ)の廻らぬ程酔つて居たが、本郷に居ると許りで、詳しく住所を云はなかつた。帰りは雨が降り出したので竹山の傘を借りて行つた限(きり)、それなりに二人は四年の間殆んど思出す事もなかつたのだ。が、唯一度、それから二月か三月以後(のち)の事だが、或日巡査が来て野村の事を詳しく調べて行つたと、下宿の主婦が話して居た事があつた。

其四年間の渠の閲歴は知る由もない。渠自身も常に

其麼話をする事を避けて居たが、それでもチヨイチヨイ口に出るもので、四年前の渠が知つてなかつた筈の土地の事が、何かの機会に話頭(わたう)に上る。静岡にも居た事があるらしく、雨の糸の木隠(こがくれ)に白い日に金閣寺を見たといふから、京都にも行つたのであらう。石井孤児院長に逢つた事があると云つて非常に敬服して居たから、岡山へも行つたらしい。取わけ竹山に想像を費さしたのは、横浜の桟橋に毎日行つて居た事があるといふ事と、其処の海員周旋屋の内幕に通暁して居た事であつた。鹿角(かづの)郡の鉱山は尾去沢も小坂もよく知つて居た。釧路へは船で来たんださうで、札幌小樽の事は知

らなかつたが、此処で一月半許りも、真砂町の或蕎麦屋の出前持をして居たと云ふ事は、町で大抵の人が知つて居た。無論これは方々に職業(くち)を求めて求め兼ねた末の事であるが、或日曜日の事、不図思付いて木下主筆を其自宅に訪問した。初めは人相の悪い奴だと思つたが、黒木綿の大分汚なくなつた袴を穿いて居たのが、蕎麦屋の出前持をする男には珍らしいと云ふので、編狭者(ひねくれもの)の主筆が買つてやつたのだと云ふ。

　主筆は時々、「野村君は支那語を知つてる癖に何故北海道あたりへ来たんだ？」と云ふが、其度渠は「支那人は臭くて可けません。」と云つた様な答をして居た。

北国の二月は暮れるに早い。四時半にはモウ共立病院の室々(へやへや)に洋燈(ランプ)の光が華やぎ出して、上履(うはぐつ)の辷る程拭込んだ廊下には食事の報知(しらせ)の拍子木が軽い反響を起して響き渡つた。

と、右側の或室から、さらでだに前屈(こご)みの身体を一層屈まして、垢着いた首巻に頤を埋めた野村が飛び出して来た。広い玄関には洋燈の光のみ眩しく照つて、人影も無い。渠は自暴糞(やけくそ)に足を下駄に突懸けたが、下駄は翻筋斗(もんどり)を打つて三尺許り彼方(むかう)に転んだ。

以前(まへ)の室から、また二人廊下に現れた。洋服を着た男は悠然(ゆったり)と彼方へ歩いて行つたが、モ一人は白い兎の跳る様に駆けて来ながら、

『野村さん〱、先刻お約束したの忘れないでよ。』と甲高い声で云つて玄関まで来たが、渠の顔を仰ぐ様にして笑ひ乍ら、『今度欺したら承知しませんよ。真実(ほんと)ですよ、ねえ野村さん。』と念を推した。これは此病院で評判の梅野といふ看護婦であつた。

渠(かれ)は唯唸る様な声を出しただけで、チラと女の顔を見たつきり、凄じい勢ひで戸外(おもて)へ出て了つた。落着かない眼が一層恐ろしくギラギラして、赤黒く脂ぎつた

顔が例の烈しい痙攣（ひきつけ）を起して居る。少なからず酔つて居るので、吐く呼気（いき）は酒臭い。

　戸外はモウ人顔も定かならぬ程暗くなつて居た。ザクザクと融けた雪が上面（うはつつら）だけ凍りかかつて、夥（おびただ）しく歩き悪い街路を、野村は寒さも知らぬ如く、自暴（やけ）に昂奮（たかぶ）つた調子で歩き出した。

「何を約束したつたらう？」と考へる。何かしら持つて来て貸すと云つた！　本？　否（いや）俺は本など一冊も持つて居ない。だが、確かに本の事だつた筈だ。何の本？　何の本だつて俺は持つて居ない。馬鹿な、マア怎（どう）でも可いさと口に出して呟いたが、何故那麼（あんな）事を云

つたらうと再（また）考へる。
渠は二時間の間此病院で過した。煙草を喫みたくなつた時、酒を飲みたくなつた時、若い女の華やいだ声を聞きたくなつた時、渠は何日でも此病院へ行く。調剤室にも、医員の室にも、煙草が常に卓子（ていぶる）の上に備へてある。渠が、横山——左の蟀谷（こめかみ）の上に二銭銅貨位な禿があつて、好んで新体詩の話などをする、二十五六のハイカラな調剤助手に強請（ねだ）つて、赤酒（せきしゆ）の一杯二杯を美味さうに飲んで居ると、屹度誰か医者が来て、私室へ伴れて行つて酒を出す。七人の看護婦の中、青ざめた看護婦長一人を除いては、皆、美しくないまでも若

かつた。若くないまでも、少くとも若々しい態度（やうす）をして居た。人間の手や足を切断したり、脇腹を切開したりするのを、平気で手伝つて二の腕まで血だらけにして居る輩（やから）であるから、何れも皆男といふ者を怖れて居ない。怖れて居ない許りか、好んで敗けず劣らず無駄口を叩く。中にも梅野といふのは、一番美しくて、一番お転婆で、そして一番ハイカラで、実際は二十二だといふけれど、打見には十八位にしか見えなかつた。野村は一日として此三つの慾望に餓ゑて居ない日は無いので、一日として此病院を訪れぬ日はなかつた。

渠が先づ入るのは、玄関の直ぐ右の明るい調剤室で

あつた。此室に居る時は、平生(いつも)と打つて変つて渠は常に元気づいて居る。新聞の材料は総て自分が供給する様な話をする。如何なる事件にしろ、記事になるとならぬは唯自分一箇の手加減である様な話をする。同僚の噂でも出ると、フフンと云つた調子で取合はぬ。渠は今日また頻(しき)りに其麼(そんな)話をして居たが、不図小宮洋服店の事を思出した。が、渠は怎したものか、それを胸の中で圧潰(おしつぶ)して了つて考へぬ様にした。横山助手は、まだ半分しか出来ぬと云ふ『野菫』と題した新体詩を出して見せた。渠はズツとそれに目を通して、唯「成程」と云つたが、今自分が或非常な長篇の詩を書き初

めて居ると云ふ事を話し出した。そして、それが少くとも六ヶ月位かかる見込だが、首尾克く脱稿したら是非東京へ行つて出版する。僕の運命の試金石はそれです、と熱心に語つた。梅野は無論其傍（そのかたはら）に居た。彼女は調剤の方に廻されて居るので。

　それから渠は小野山といふ医者の室に伴れて行かれて、正宗とビールを出された。医者は日本酒を飲まぬといふので、正宗の一本は殆んど野村一人で空にした。梅野とモ一人の看護婦が来て、林檎を剥いたり、※［＃「魚＋昜」、84-下-11］（するめ）を焼いたりして呉れたが、小野山が院長から呼びに来て出て行くと、モ一人の方の看護婦

も立つた。渠は遽かに膝を立直して腕組をしたが、懵乎（ぼうつ）とした頭脳（あたま）を何かしら頻りに突つく。暫し無言で居た梅野が、「お酌しませうか。」と云つて白い手を動かした時、野村の頭脳に火の様な風が起つた。「オヤ、モウ空（から）になつててよ。」と女は瓶を倒した。野村は酔つて居たのである。

少し話したい事があるから、と渠が云つた時、女は「さうですか。」と平気な態度（やうす）で立つた。二人は人の居ない診察所に入つた。

暖炉は冷くなつて居た。うそ寒い冬の黄昏（たそがれ）が白い窓掛（カーテン）の外に迫つて居て、モウ薄暗くなりかけた室の中

に、種々（いろいろ）な器械の金具が佗し気に光つて居る。人気なき広間に籠る薬の香（にほひ）に、梅野は先づ身慄ひを感じた。

『梅野さん、僕を、酔つてると思ひますか、酔はないで居ると思ひますか？』と云つて、野村は矢庭に女の腕を握つた。其声は、恰も地震の間際に聞えるゴウと云ふ地鳴に似て、低い、沢（つや）のない声ではあつたが、恐ろしい力が籠つて居た。女は眼を円（まる）くして渠を仰いだが、何とも云はぬ。

『僕の胸の中を察して下さい。』と、さも情に迫つた様な声を出して、堅く握つた女の腕を力委せに引寄せたと思ふと、酒臭い息が女の顔に乱れて、一方の手が肩

に掛る。梅野は敏捷(すばしこ)く其手を擦り抜けて、卓子(テイブル)の彼方へ逃げた。

二人は小さい卓子を相隔てて向ひ合つた。渠は、右から、左から、再び女を捉へようと焦慮(あせ)るけれど、女は其度男と反対の方へ動く。妙に落着払つた其顔が、着て居る職服(きもの)と見分がつかぬ程真白に見えて、明確(さだか)ならぬ顔立の中に、瞬きもせぬ一双の眼だけが遠い空の星の様。其顔と柔かな肩の辷りが廓然(くつきり)と白い輪廓を作つて、仄暗い薬の香の中に浮んで、右に左に動くのは、女でもない、人でもない、影でもなければ、幻でもない。若樹の桜が時ならぬ雪の衣を着て、雪の重みに堪

へかねて、ユラリユラリと揺れるのだ、ユラリユラリと動くのだ。が、野村の眼からは、唯モウ抱けば温かな柔かな、梅野でも誰でもない、推せば火が出る様な女の肉体だけ見える。

　何分経つたか記憶が無い。その間に渠の頭脳は、表面（うはつつら）だけ益々苛立つて来て、底の底の方が段々空虚（からつぽ）になつて来る様な気分になつた。それでも一生懸命女を捉へようと悶躁（もが）いて居たが、身体はブルブル顫へて居て、左の手をかけた卓子の上の、硝子瓶が二つ三つ、相触れてカチカチと音を立てて居た。

　ガタリと扉が開いて、小野山が顔を出した。

『此処でしたか、何処へ行つたと思つたら。』

と、極りが悪さうにした顔に一寸眼を光らして、ヅカヅカ入つて来た。

『怎したんです。』と梅野へ。

『アッハハハ。』と、女は底抜な高い声を出して笑つたが、モウ安心と云ふ様に溜息を一つ吐いて、『野村さんが面白い事仰しやるもんですからね、私逃げて来たの。』

『何です、野村さん？』医者は妙に笑つて野村を見た。

野村は、気が抜けた様に、石像の如く立つて、目には女を見た儘、身動もせぬ。

『また催眠術をかけて呉れるからツて仰しやるの。』
と女は引取つた。『そしたら私の行きたい所は何処へでも伴れてつて見せるし、逢ひたい人には誰にでも逢はせて下さるんですツて。だけど私、過日(こなひだ)でモウ皆に笑はれて、懲々(こりごり)してるんですもの。ぢや施(か)けて下さいつて、欺して逃げて来たもんだから、野村さんに追駆(おつか)けられたのよ。』
『然うでしたか。』
野村は、発作的に右の手を一寸前に出したが、
『アハハハ。ぢや此次にしませう、此次に。此次には屹度ですよ、屹度施(か)かけますよ。』と変に剛(こはば)つた声で云

つて、物凄く「アツハハ。」と笑つたが、何時持つて来たとも知れぬ卓子の上の首巻と帽子を取つて、首に捲くが早いか飛び出して来たのであつた。

脈といふ脈を、アルコールが駆け廻つて、血の循環（めぐり）が沸（たぎ）り立つ程早い。さらでだに苛立勝（いらだちがち）の心が、タスカローラの底の泥まで濁らせる様な大時化（おほしけ）を喰つて、唯モウ無暗に神経が昂奮（たかぶ）つて居る。野村は頤を深く首巻に埋めて、何処といふ目的もなく街から街へ廻り歩いて居た。

女は渠の意に随はなかつた！　然し乍ら渠は、此侮辱を左程に憤つては居なんだ。医者の小野山！　彼奴（あいつ）が悪い、失敬だ、人を馬鹿にしてる。何故アノ時顔を出しやがつたか。馬鹿な。俺に酒を飲ました。酒を飲ますのが何だ。失敬だ、不埒だ。用も無いのに俺を探す。黙つて自分の室に居れば可いぢやないか。黙つて看護婦長と乳繰合つて居れば可いぢやないか。看護婦？　イヤ不図したら、アノ、モ一人の奴が小野山に知らしたのぢやないか、と疑つたが、看護婦は矢張女で、小野山は男であつた。渠は如何なる時でも女を自分の味方と思つてる。如何なる女でも、時と処を得さ

へすれば、自分に抱かれる事を拒まぬものと思つて居る。且夫れ、よしや知らしたのは看護婦であるにしても、アノ時アノ室に突然入つて来て、自分の計画を全然打壊したのは医者の小野山に違ひない。小野山が不埒だ、小野山が失敬だ。彼奴は俺を馬鹿にしてる。

…………

知らぬ獣に邂逅した山羊の様な眼をして、女は卓子の彼方に立つた！　然しアノ眼に、俺を厭がる色が些とも見えなかつた。然うだ、吃驚したのだ。唯吃驚したのだ。尤も俺も悪かつた。モ少し何とか優しい事を云つてからでなくちやならん筈だ。余り性急にやつた

から悪い。それに今夜は俺が酔つて居た。酔つた上の悪戯（いたづら）と許り思つたのかも知れぬ。何にしても此次だ、今夜は成功しかねたが此次、此次、…………

だが、モウ五分間アノ儘で居たら？　然う〳〵、俺が出て来る時何とか云つた。ハテ何だつたらう？　呍（うん）「約束を忘れるな。」か！　「約束」は適切だ。女といふものは一体、男に憎まれる事を嫌ひなものだ。況んや自分の嫌つても居ない男にをやだ。殊に俺は新聞記者だ。新聞記者に憎まれたら最後ぢやないか。幸ひに竹山の奴まだ土地の事情に真暗だ。俺が云ひさへすれや何でも書く。彼奴に書かしたら又素的に捏ね廻して

書くからエライ事になる。イヤ待て、待て、若しも、竹山がアノ病院に出入する様になるとしたら、然うだ、矢張一番先に梅野に眼をつけるに違ひない。竹山の下宿は病院の直ぐ前だ。待て〳〵、此次は明日の晩にしよう。善は急げだ。

若し小野山さへ来なかつたら、と考へが再(また)同じ所に還る。アノ卓子が無かつたら怎(どう)だつたらう？　否、アノ卓子を俺が別の場所へ取除けちやつたら怎だつたらう？　女は二三歩後方にたじろぐ。そして、軽く尻餅を突いて、そして、そして、「許して下さい。」と囁やいて、暗(やみ)の中から真白な手を延べる。……噫、彼奴(あいつ)、

彼奴、小野山の奴、アノ畜生が来た許りに……。

渠は恁麼(こんな)事を止度もなく滅茶苦茶に考へ乍ら、目的(あて)もなく唯町中を彷徨(うろつ)き廻つて居た。何処から怎(どう)歩いたか自身にも解らぬ。洲崎町の角の煙草屋の前には二度出た。二度共硝子戸越に中を覗いて見たが、二度共例の恥かしがる娘が店に坐つてなかつた。暗い街から明るい街、明るい街から暗い街、唯モウ無暗に駆けずり廻つて、同じ坂を何度上つたか知れぬ。同じ角を何度曲つたか知れぬ。

が、渠は矢張り明るい街よりも、暗い街の方を多く選んで歩いて居た。そして、明るい街を歩く時は、

頭脳（あたま）が紛糾（こんがら）かつて四辺（あたり）を甚麼（どんな）人が行かうと気にも止めなかつたに不拘、時として右側に逸（そ）れ、時として左側に寄つて歩いて居た。一町が間に一軒か二軒、煙草屋、酒類屋（さかや）、鑵詰屋、さては紙屋、呉服屋、蕎麦屋、菓子屋に至る迄、渠が其馬鹿に立派な名刺を利用して借金（かり）を拵へて置かぬ家は無い。必要があればドン〳〵借りる。借りるけれども初めから返す予算（よさん）があつて借りるのでないから、流石に渠は其家（そのうち）の人に見られるのを厭であつた。今夜に限らず、借金のある店の前を通る時は、成るべく反対の側の軒下を歩く。

幸ひ、誰にも見付かつて催促を受ける様な事はなか

つた。が唯一人、浦見町の暗闇(くらがり)を歩いてる時に、『オヤ野村さんぢやなくつて？　マア何方へ行(いら)つしやるの？』と女に呼掛けられた。

渠は唸る様な声を出して、ズキリと立止つて、胡散臭(うさんくさ)く対手を見たが、それは渠がよく遊びに行く郵便局の小役人の若い細君であつた。

『貴女(あなた)でしたか。』

と云つて其儘行過ぎようとしたが、女がまだ歩き出さずに見送つてる様だつたので、引返して行つて、鼻と鼻と擦合(すれあ)ひさうに近く立つた。

『貴女お一人で何方へ？』

『姉の所へ行つて来ましたの。マア貴方は酔つていらつしやるわね。』
『酔つて？　然うです、然うです、少し飲（や）つて来ました。だが女一人で此路は危険（けんのん）ですぜ。』
『慣れてますもの。』
『慣れて居ても危険は矢張危険ぢやないですか。危険！　若しかすると恁うしてる所へ石が飛んで来るかも知れません、石が。』と四辺を見廻したが、一町程先方（むかう）から提燈が一つ来るので、渠は一二歩後退（あとずさ）つた。
『僕だつて一人歩いてると、チト危険な事があります。』
『マア。ですけど今夜は、宅が風邪の気味で寝（やす）んでる

もんですから、厭だつたけど一人行つて来ましたの。』
『然うですか。』と云つたが、フン、宅とは何だい？俺の前で嬶（かかあ）ぶらなくたつて、貴様みたいな者に手をつけるもんか。と云ふ気がして、ツイと女を離れたなり、スタ〳〵駆け出した。腥さい笑に眼は暗（やみ）ながらギラギラ光つて居た。

　恁麼（こんな）風に、彼は一時間半か二時間の間、盲目（めくら）滅法駆けずり廻つて居たが、其間に酔が全然醒めて了つて、緩んだと云つても零度近い夜風の寒さが、犇々（ひしひし）と身に沁みる。頤（おとがひ）を埋めた首巻は、夜目にも白い呼気（いき）を吸つて、雪の降つた様に凍つて居た。雲一つない鋼鉄色（はがねいろ）

の空には、鎗の穂よりも鋭い星が無数に燦（きらめ）いて、降つて来る光が、氷り果てた雪路の処々を、鏡の欠片（かけら）を散らかした様に照して居た。

三度目か四度目に市庁坂を下りる時、渠は辷るまいと大事を取つて運んで居た足を不図留めて、広々とした港内（みなと）の夜色を見渡した。冷い風が喉から胸に吹き込んで、紛糾（ごちやごちや）した頭脳（あたま）の熱さまでスウと消える様な心地がする。星明りに薄（うつす）りと浮んだ阿寒山（あかんざん）の雪が、塵も動かぬ冬の夜の空を北に限つて、川向（かはむかひ）の一区域（ひとしきり）に燈光（ともしび）を群がらせた停車場から、鋭い汽笛が反響も返さず暗を劈（つんざ）いた。港の中には汽船（ふね）が二艘（にはい）、四つ五つの

火影(ほかげ)がキラ〱と水に散る。何処ともない波の音が、絶間(たえま)もない単調の波動を伝へて、働きの鈍り出した渠の頭に聞えて来た。

　と、渠は烈しい身顫ひをして、再(また)しても身を屈(こご)ませ乍ら、大事々々に足をつり出したが、遽かに腹が減つて来て、足の力もたど〱しい。喉からは変な水が湧いて来る。二時間も前から鳩尾(みぞおち)の所に重ねて、懐に入れておいた手で、襯衣の上からズウと下腹まで摩(さす)つて見たが、米一粒入つて居ぬ程凹んで居る。渠はモウ一刻も耐らぬ程食慾を催して来た。それも其筈、今朝九時頃に朝飯を食つてから、夕方に小野山の室で酒を飲

んで鰯の焙(あぶ)つたのを舐(しやぶ)つた限(きり)なのだ。

浅間しい事ではあるが、然しこれは渠にとつて今日に限つた事でなかつた。渠は米町裏のトある寺の前の素人下宿に宿つて居るけれど、モウ二月越(ふたつきごし)下宿料を一文も入れてないので、五分と顔を見てさへ居れば、直ぐそれを云ひ出す宿の主婦(おかみ)の面(つら)が厭で、起きて朝飯を食ふと飛び出した儘、昼飯は無論食はず、社から退けても宿へ帰らずに、夕飯にあり付きさうな家を訪ね廻る。でなければ、例の新聞記者と肩書を入れた名刺を振廻して、断られるまでは蕎麦屋牛鍋屋の借食(かりぐひ)をする。それも近頃では殆んど八方塞がりになつたので、少し

の機会も逸(のが)さずに金を得る事ばかり考へて居るが、若し怎(どう)しても夕飯に有付けぬとなると、渠は何処かの家に坐り込んで、宿の主婦の寝て了ふ十時十一時まで、用もない喫茶談(ちやのみばなし)を人の迷惑とも思はぬ。十五円の俸給は何処に怎(どう)使つて了ふのか、時として二円五十銭といふ畳付(たたみつき)の下駄を穿いたり、馬鹿に派手な羽織の紐を買つたりするのは人の目にも見えるけれど、残余(あと)が怎なるかは、恐らく渠自身でも知つて居まい。

　餓ゑた時程人の智(かしこ)くなる時はない。渠は力の抜けた足を急がせて、支庁坂を下(お)りきつたが、左に曲ると両側の軒燈(ともしび)明るい真砂町の通衢(とほり)。二町許りで、トある

角に立つた新築の旅館の前まで来ると、渠は遽かに足を緩めて、十五六間が程を二三度行きつ戻りつして居たが、先方（むかう）から来た外套の頭巾目深の男を遣過（やりすご）すと、不図後前（あとさき）を見廻して、ツイと許り其旅館の隣家（となり）の軒下に進んだ。

硝子戸が六枚、其内側に吊した白木綿の垂帛（カーテン）に洋燈の光が映えて、廂の上の大きなペンキ塗の看板には、「小宮洋服店」と書いてあつた。

渠は突然（いきなり）其硝子戸を開けて、腰を屈めて白木綿を潜つたが、左の肩を上げた其影法師が、二分間許りも明瞭（くつきり）と垂帛（カーテン）に映つて居た。

此家は、三日程前に、職人の一人が病死して葬式を出した家であつた。

三十分許り経つと、同じ影法師が又もや白木綿に映つて、「態々(わざわざ)お出下すつたのに何もお構ひ申しませんで。」といふ女の声と共に、野村は戸外へ出て来た。十間も行くと、旅館の角に立止つて後を振顧(ふりかへ)つたが、誰も出て見送つてる者がない。と渠は徐々(そろそろ)歩き出しながら、袂を探つて何やら小さい紙包を取出して、旅館の窓から漏れる火光(あかり)に披(ひら)いて見たが、

『何だ、唯一円五十銭か！』

と口に出して呟いた。下宿料だけでも二月分で二十二円！　少くとも五円は出すだらうと思つたのに、と聞えぬ様にブツ〱云つて、チヨツと舌打をしたが、気が付いた様に急がしく周囲を見廻した。それでも渠は珍らしさうに五十銭銀貨三枚を握つて見て、包紙は一応反覆して何か書いてあるかと調べた限り、皺くちやにして捨てゝ了つたが、又袂を探してヘナ〱になつた赤いレース糸で編んだ空財布を出して、それに銀貨を入れて、再び袂に納つた。

　さてこれから怎したもんだらう？　と考へたが、二

三軒向うに煙草屋があるのに目を付けて、不取敢（とりあへず）行つて、「敷島」と「朝日」を一つ宛（づつ）買つて、一本点（つ）けて出た。モ少し行くと右側の狭い小路の奥に蕎麦屋があるので、一旦其方へ足を向けたが、「イヤ、先づ竹山へ行つて話して置かう。」と考へ付いて、引返して旅館の角を曲つたが、一町半許りで四角になつて居て、左の角が例の共立病院、それについて曲ると、病院の横と向合（むかひあ）つて竹山の下宿がある。

　竹山の室は街路（みち）に臨んだ二階の八畳間で、自費で据附けたと云ふ暖炉が熾んに燃えて居た。身の廻りには種々（いろいろ）の雑誌やら、夕方に着く五日前の東京新聞やら手

紙やらが散らかつて居て、竹山は読みさしの厚い本に何かしら細かく赤インキで註を入れて居たが、渠は入ると直ぐ、ボーツと顔を打つ暖気（あたたかさ）に又候（またぞろ）思出した様に空腹を感じた。来客の後と見えて、支那焼の大きな菓子鉢に、マスマローと何やらが堆（うずた）かく盛つて、煙草盆の側（わき）にあるのが目に附く。明るい洋燈の光りと烈しい気象の輝く竹山の眼とが、何といふ事もなしに渠の心を狼狽（うろたへ）させた。

『頭痛が癒りましたか？』と竹山に云はれた時、その事はモウ全然忘れて居たので、少なからず周章（どぎまぎ）したが、それでも流石、

『ハア、頭ですか？　イヤ今日は怎も失礼しました。あれから向うの共立病院へ来て一寸診て貰ひましたがねす。ナニ何でもない、酒でも飲めば癒るさツて云ふもんですから、宿へ帰つて今迄寝て来ました。主婦（おかみ）の奴が玉子酒を拵（こしら）へてくれたもんですから、それ飲んで寝たら少し汗が出ましたねす。まだ底の方が些（ちよつ）と痛みますどもねす。』と云つて、「朝日」を取出した。

『少し聞込んだ事があつたんで、今廻つて探つて見ましたが、ナーニ嘘でしたねす。』

『然うかえ、でもマア悠乎（ゆつくり）寝（やす）んでれば可かつたのに、御苦労でしたな。』

『小宮といふ洋服屋がありますねす。』と云つて、野村は鋭どい眼でチラリと竹山の顔を見たが、『彼家（あそこ）で去年の暮に東京から呼んだ職人が、肋膜に罹（かか）つて遂に此間死にましたがねす。それを其、小宮の嬶が、病気してゝ稼がないので、ウント虐待したツて噂があつたんですから、行つて見ましたがねす。』

『成程。』と云つたが、竹山は平日（いつも）の様に念を入れて聞く風でもなかつた。

『ナーニ、恰度アノ隣の理髪店（とこや）の嬶が、小宮の嬶と仲が悪いので、其麼事を云ひ触らしたに過ぎなかつたですよ。』と云つて、軽く「ハッハハ。」と笑つたが、其

実渠は其噂を材料（たね）に、幸ひ小宮の家は一寸有福でもあり「少くも五円」には仕ようと思つて、昨日も一度押かけて行つたが、亭主が留守といふので駄目、先刻（さつき）再（また）行つて、矢張亭主は居ないと云つたが、媼の奴頻りに其を弁解してから、何れ又夫（やど）がお目にかゝつて詳しく申上げるでせうけれどもと云つて、一円五十銭の紙包を出したのだ。

　これと云ふ話も出なかつたが、渠は頻りに「ねす」を振廻はして居た。一体渠は同じ岩手県でも南の方の一関近い生れで、竹山は盛岡よりも北の方に育つたから、南部藩と仙台藩の区別（ちがひ）が言葉の調子にも明白（あきらか）で、

少しも似通つた所がないけれども、同県人といふ感じが渠をしてよく国訛りを出させる。それに又渠は、其国訛りを出すと妙に言葉が穏（おとな）しく聞える様な気がするので、目上の者の前へ出ると殊更「ねす」を沢山使ふ癖があつた。

程なくして渠は辞して立つたが、竹山は別に見送りに立つでもなかつた。で、自分一人室の中央に立上ると、妙に頭から足まで竹山の鋭い眼に度（はか）られる様な心地がして、畳触りの悪い自分の足袋の、汚なくなつて穴の明いてるのが心恥（うらはづ）かしく思はれた。

戸外（そと）へ出ると、一寸病院の前で足を緩めたが、真砂

町へ来るや否や、早速新しい足袋を買つて、狭い小路の奥の蕎麦屋へ上つた。

二階の四畳半許りの薄汚い室、座蒲団を持つて入つて来たのが、女中でなくて、印半纏（しるしばんてん）を着た若い男だつたので、渠は聞えぬ程に舌打をしたが、「天麩羅二つ。」と吩附（いひつけ）てやつてドシリと胡坐をかくと、不取敢急がしく足袋を穿き代へて、古いのを床の間の隅ツこの、燈光（あかり）の届かぬ暗い所へ投出した。「敷島」を出して成るべく悠然（ゆつたり）と喫ひ出したが、一分経つても、二分過ぎても、まだお誂へが来ない。と、渠は立つて行つて其古足袋を、壁の下の隅に、大きな鼠穴が明いてる所へ

へシ込んで了つた。

間もなく下では何か物に驚いた声がして、続いて笑声が起つたが、渠は「敷島」を美味（うま）さうに吹かしながら、呼吸を深くして腹を凹ましたり、出したり、今日位腹を減らした事がないなどと考へて居た。

所へ階段（はしご）を上る足音がしたので、来たナと思つたから、腹の運動を止めて何気ない顔をしてると、以前の若い男が小腰を屈めて障子を明けた。

『へイ、これは旦那のお足袋ぢやムいませんか？ 鼠が落（おつ）こちたかと思つたら、足袋が降つて来たと云ふので、台所ぢや貴方、吃驚いたしましたんで。へイ、全

く、怎も、ヘイ。』と妙な薄笑をし乍ら、今し方壁の鼠穴へヘシ込んだ許りの濡れた古足袋を、二つ揃へて敷居際に置いたなり、障子を閉めて狐鼠々々(こそこそ)下りて行く。

呆然として口を開いた儘聞いて居た渠は、障子が閉まると、クワツと許り上気して顔が火の出る程赤くなつた。恥辱の念と憤怒の情が、ダイナマイトでも爆発した様に、身体中の血管を破つて、突然(いきなり)立上つたが、腹が減つてるのでフラフラと蹌踉(よろめ)く。

よろめく足を踏み耐(こた)へて、室から出ると、足音荒く階段を下りて来たが、例(いつも)の女中が恰度丼を二つ載せた膳を持つて来た所で、

『オヤ。』

と尻上りに叫んで途を披いた。

『モウ要(い)らん。』と凄じく怒鳴るや否や、周章(あたふた)下駄を突懸けて、疾風の様に飛出したが、小路の入口でイヤと云ふ程電信柱に額を打付(ぶつつ)けた。後では、男女を合せて五六人の高い笑声が、ドツと許り喊(とき)の声の様に聞えた様であつた。

二町許り駆けて来ると、セイセイ呼吸が逸(はづ)んで来て、胸の動悸のみ高い。まだ忌々(いまいま)しさが残つて居たが、そ

れも空腹（すきつぱら）には勝てず、足を緩めて、少し動悸が治まると、梅沢屋と云ふ休坂下（やすみざかした）の蕎麦屋へ入つた。

『お誂へは？』と反歯（そつぱ）の女中に問はれて、「天麩羅」と云はうとしたが、先刻の若い男の顔がチラと頭に閃いたので、

『何でも可い。』と云つて了つた。

『天麩羅に致しませうか？　それとも月見なり五目なり、柏（かしは）も直ぐ出来ますが。』

『呍（うん）、その、何（ど）れでも可い。柏でも可い。』

かくて渠は、一滴の汁も残さず柏二杯を平らげたが、するとモウ心にも身体にも坐りがついて、先刻の事を

考へると、我ながら滑稽（をかし）くなつて遂口に出して笑つて見る。手を叩いて更に「天麩羅二つ」と吩咐（いひつ）けた。

　それも平らげて了ふと、まだ何か喰ひたい様だけれど、モウ腹が大分張つて来たので、止めた。と、眠気が催すまでに悪落着がして来て、悠然（ゆつたり）と改めて室の中を見廻したが、「敷島」と「朝日」と交代に頻（しきり）に喫ひながら、遂々（たうたう）ゴロリと横になつた。それでも、階段に女中の足音がする度、起直つて知らん振をして居たが、恁麼（こんな）具合にして渠は、階下（した）の時計が十時を打つまで、随分長い間此処に過した。一度、手も拍たぬのに女中が来て、「お呼びでムいますか?」と襖を開けたが、そ

れはモウ帰つて呉れと云ふ謎だと気が付いたけれど、悠然と落着いて了つた渠の心は、それしきの事で動くものでない。

恁許（かばか）り悠然した心地は渠の平生に全くない事であつた。顔には例の痙攣も起つて居ない。物事が凡て無造作で、心配一つあるでなく、善とか悪とか云ふ事も全く脳裡（あたま）から消えて了つて、渠はそれからそれと静かに考へを廻らして居たが、第一に多少の思慮を費したのは、小宮洋服店から如何にしてモツト金を取るべきかと云ふ問題であつた。それには自分一人よりも相棒のある方が都合が可いと考へついたが、渠は其人選にア

レかコレかと迷つた末、まだ何も知らぬ長野の奴を引張り込まうと決心した。
と、渠は其長野の馬鹿に気の利かぬ事を思ひ出して、一人で笑つた。それは昨日の事、奴が竹山から東京電報の翻訳を命ぜられて、唯五六通に半時間もかかつて居たが、
『ええ一寸伺ひますが、……怎(どう)もまだ慣れませんで（と申訳をしておいて、）カンカインとは怎(どう)かくんでせうか。』
『感化院さ。』と云つて竹山が字を書いて見せた。すると、

『ア然うですか。ぢやモ一つ、ええと、鎌田といふ大臣がありましたらうか？　一寸聞きなれない様ですけれど。』

『無い。』

『然うですか喃（なあ）。イヤ其、電文にはカナダとあるんですけど、金田といふ大臣は聞いた事がないから、鎌田の間違ぢやないかと思ひまして。』

『ドレ見せ給へ。』と竹山は其電報を取つて、『何だ、「加奈太（カナダ）大臣ルミユー氏」ぢやないか。今度日本へ来た加奈太政府の労働大臣さ。』

『然うですか。怎も慣れませんもので。』

　これで皆が思はず笑つたので、流石に長野も恥かしくなつたと見えて、顔を真赤にしたが、今度は自分の袂を曳いて、「陸軍ケイホウのケイホウは怎う書きませう。」と小声で訊ねる、「警報さ」と書いて見せると、「然うですか、怎も有難う。」と云つたが、「何だい、何だい？」と竹山が云ふので、「陸軍ケイホウです。」と答へると、「ケイホウは刑罰の刑に法律の法だぜ。」と云ふ。俺もハツとしたが、長野は「然うですか。」と云つたきり、俺には何とも云はず、顔を赤くした儘、其教へられた通り書いて居た。すると竹山は、以後（これから）毎日東京や札幌の新聞を読めと長野に云つて、

『鎌田といふ大臣のあるか無いかは理髪店（とこや）の亭主だつて知つてるぢやないか。東京新聞を読んで居れば、刻下の問題の何であるかが解るし、翌日の議会の日程に上る法律案などは札幌小樽の新聞の電報に載つてるし、毎日新聞さへ読んでれば電報の訳せん事がない筈なんだ。昨晩だつて君、九時頃に来た電報の「北海道官有林附与問題」といふのを、君が「不用問題」と書いたつて、工場の小僧共が笑つてたよ。』

長野の真赤にした大きい顔が、霎時（しばし）渠の眼を去らないで、悠然（ゆつたり）とした笑を続けさせて居た。

それから渠は、種々（いろいろ）と竹山の事も考へて見た。竹山

が折角東京へ乗込んで詩集まで出して居ながら、新聞記者などになつて北海道の隅ツこへ流れて来るには、何かしら其処に隠れた事情があるに違ひない。屹度暗い事でもして来たんだらう。然うでなければ、と考へて渠は四年前の竹山について、それかこれかと思出して見たが、一度下宿料を半金だけ入れて、残部(あと)は二三日と云つたのが、遂々(たうたう)十日も延びたので、下宿のアノ主婦が少し心配して居つた外、これぞと云ふ事も思出せなかつた。

竹山の下宿は社に近くて可い、と思ふ。すると又病院の事が心に浮ぶ。それとなき微笑(ほほゑみ)が口元に湧いて、

梅野の活潑なのが喰ひつきたい程可愛く思はれる。梅野は美しい、白い。背は少し低いが……アノ真白(ましろ)な肥つた脛、と思ふと、渠の口元は益々緩んだ。医者の小野山も殆んど憎くない。不図したら彼奴も此頃では、看護婦長に飽きて梅野に目をつけてるのぢやないかとも考へたが、それでも些(ちつ)とも憎くない。梅野は美しいから人の目につく、けれども矢張彼女(あれ)は俺のもんさ。末は怎でも今は俺のもんさ。彼女の挙動(やうす)はまだ男を知つて居ないらしいが、那麼(あんな)に若く見える癖に二十二だつていふから、もう男の肌に触れてるかも知れぬ。それも構はんさ。大抵の女は、表面(うはべ)こそ処女だけれども、

モウ二十歳を越すと男を知つてるから喃（なあ）。…………

十時の時計を聞くと、渠は勘定を済ませて蕎麦屋から出た。休坂を上つて釧路座の横に来ると、十日程前に十軒許り焼けた火事跡に、雪の中の所々から、真黒な柱や棟木が倒れた儘に頭を擡げて居た。白い波の中を海馬（かいば）が泳いでる様に。

少し行くと、右側のトある家の窓に火光（あかり）がさして居る。渠は其窓側（まどぎは）へ寄つて、コツコツと硝子を叩いた、白い窓掛（カーテン）に手の影が映つて半分許り曳かれると、窓の

下の炬燵に三十五六の蒼白い女が居る。
『蝶吉さんは未だ帰らないの？』
と優しい低い声で云つた。
『え、未だ。』と女は窓外を覗いたが、『マア野村さんですか。姐さん達は十一時でなくちや帰りませんの。』
これは渠がよく遊びに行く芸者の宅で、蝶吉と小駒の二人が、「小母さん」と呼ぶ此女を雇つて万事の世話を頼んで居る。日暮から十二時過までは、何日でも此陰気な小母さんが一人此炬燵にあたつてるので、野村は時として此小母さんを何とか仕ようと思ふ事がないでもない。女は窓掛に手をかけた儘、入れとも云はず

窓外（そと）を覗いてるので、渠は構はず入つて見ようとも思つたが、何分にも先刻程（さきほど）から気が悠然（ゆつたり）と寛大になつてるので、遂ぞ起した事のない「可哀さうだ。」といふ気がした。

『又来るよ。』と云ひ捨てた儘、彼は窓側（まどぎは）を離れて、「主婦（おかみ）はもう大丈夫寝たナ。」と思ひ乍ら家路へ歩き出した。

四角（よつかど）を通越して浦見町が、米町になる。二町許り行くと、左は高くなつた西寺（にしでら）と呼ぶ真宗の寺、それに向合つた六軒長屋の取突（とつつき）の端が渠の宿である。案の如く入口も窓も真暗になつて居る。渠は成るべく音のしな

い様に、入口の硝子戸を開けて、閉（た）てて、下駄を脱いで、上框（あがりがまち）の障子をも開けて閉てた。此室（ここ）は長火鉢の置いてある六畳間。亭主は田舎の村役場の助役をして居るので、主婦と其甥に当る十六の少年（こども）と、三人の女児（をんなのこ）とが、此室に重なり合ふ様になつて寝て居るのだが、渠は慣れて居るから、其等の顔を踏付ける事もなく、壁側（かべぎは）を伝つて奥の襖（からかみ）を開けた。

此室（ここ）も亦六畳間で、左の隅に据ゑた小さい机の上に、赤インキやら黒インキやらで散々楽書をした紙笠の、三分心の洋燈が、螢火ほどに点つて居た。不取敢その心（しん）を捻上げると、パツと火光が発して、暗（やみ）に慣れた眼

の眩しさ。天井の低い、薄汚い室の中の乱雑が一時に目に見える。ゾクゾクと寒さが背に迫るので、渠は顔を顰蹙めて、火鉢の火を啄った。

同宿の者が三人、一人は入口の横の三畳を占領してるので、渠は郵便局へ出て居る佐久間といふ若い男と共に此六畳に居るのだ。佐久間はモウ寝て居て、然も此方へ顔を向けて眠ってるが、例の癖の、目を全然閉ぢずに、口も半分開けて居る。渠は、スヤスヤと眠った安らかな其顔を眺めて、聞くともなく其寝息を聞いて居たが、何かしら怎う自分の心が冷えて行く様な気がする。此男は何時でも目も口も半分開けて寝てるが、

俺も然うか知ら。俺は口だけ開けてるかも知れぬ、など考へる。

煙草に火をつけたが、怎したものか美味くない。気がつくとそれは「朝日」なので、袂を探して「敷島」の袋を出したが、モウ三本しか残つて居なかつた。馬鹿に喫んで了つたと思ふと、一本出して惜しさうに左の指で弄り乍ら、急いで先ののを、然も吸口まで焼ける程吸つて了つた。で、「敷島」に火をつけたが、それでも左程美味くない。口が荒れて来たのかと思ふと、煙が眼に入る。渠は渋い顔をして、それを灰に突込んだ。

眼を閉ぢずに寝るとは珍しい男だ、と考へ乍ら、また佐久間の顔を見た。すると、自分が、一生懸命「閉ぢろ、閉ぢろ。」と思つて居ると、佐久間は屹度アノ眼を閉ぢるに違ひないと云ふ気がする。で、下腹にウンと力を入れて、ギラギラする眼を恐ろしく大きくして、下唇を噛んで、佐久間の寝顔を睨め出した。寝息が段々急(せは)しくなつて行く様な気がする。一分、二分、三分、……佐久間の眼は依然として瞬きもせず半分開いて居る。

　何だ馬鹿々々しいと気のついた時、渠は半分腰を浮かして、火鉢の縁に両腕を突張つて、我ながら恐ろし

い形相（ぎやうさう）をして居た。額には汗さへ少し滲み出して居る。渠は平手でそれを拭つて腰を据ゑると、今迄顔が熱（ほて）つて居たものと見えて、血が頭からスウと下りて行く様な気がする。動悸も少ししてゐる。何だ、馬鹿々々しい、俺は怎して恁う時々、浅間しい馬鹿々々しい事をするだらうと、頻りに自分と云ふものが軽蔑される、…………

止度もなく、自分が浅間しく思はれて来る。限りなく浅間しいものの様に思はれて来る。顔は忽ち燻（くす）んで、喉がセラセラする程胸が苛立つ。渠は此世に於て、此自蔑の念に襲れる程厭な事はない。

と、隣室でドサリといふ物音がした。咄嗟(とつさ)の間に渠は、主婦(おかみ)が起きて来るのぢやないかと思つて、ビクリとしたが、唯寝返りをしただけと見えて、立つた気色(けはひ)もせぬ。ムニヤムニヤと少年が寝言を言ふ声がする。漸(やつ)と安心すると、動悸が高く胸に打つて居る。

処々裂けた襖、だらしなく吊下つた壁の衣服、煤ばんで雨漏の痕跡(かた)がついた天井、片隅に積んだ自分の夜具からは薄汚い古綿が喰(は)み出してる。ズーツと其等を見廻す渠の顔には何時しか例の痙攣が起つて居た。

噫(ああ)、浅間しい！　恁(か)う思ふと、渠はポカンとして眠つて居る佐久間の顔さへ見るも厭になつた。渠は膝を

立直して小さい汚ない机に向つた。

埃だらけの硯、歯磨の袋、楊枝、皺くちやになつた古葉書が一枚に、二三枚しかない封筒の束、鉄筆(ペン)に紫のインキ瓶、フケ取さへも載つて居る机の上には、中判の洋罫紙を紅いリボンで厚く綴ぢた、一冊の帳面がある。表紙には『創世乃巻』と気取つた字で書いて、下には稍(やや)小さく「野村新川(しんせん)。」

渠は直ちにそれを取つて、第一頁を披いた。

これは渠が十日許り前に竹山の宿で夕飯を御馳走になつて、色々と詩の話などをした時思立つたので、今日病院で横山に吹聴した、其所謂六ヶ月位かかる見込

だといふ長篇の詩の稿本であつた。渠は、其題の示す如く、此大叙事詩に、天地初発の暁から日一日と成された、絶大なる独一真神の事業を謳(うた)つて、アダムとイヴの追放に人類最初の悲哀の由来を叙し、其掟(おきて)られたる永遠の運命を説いて、最後の巻には、神と人との間に、朽つる事なき梯子をかけた、耶蘇基督の出現に、人生最高の理想を歌はむとして居る。そして、先づ以て、涙の谷に落ちた人類の深き苦痛と悲哀と、その悲哀に根ざす霊魂の希望とを歌ふといふ序歌だけでも、優に二百行位になる筈なので、渠は此詩の事を考へると、話に聞いただけの（随つて左程豪(えら)いとも面白いと

も思はなかつた〕、［＃「思はなかつた〕、」はママ］ダンテの『神聖喜曲（ジヴイナコメジア）』にも劣らぬと思ふので、其時は、自分が今こそ恁麽（こんな）釧路あたりの新聞の探訪をしてるけれど、今に見ろ、今に見ろ、と云ふ様な気になる。

　　嗚呼々々、太初（たいしよ）、万有（ものみな）の
　いまだ象（かたち）を…………

と、渠は小声に抑揚（ふし）をつけて読み出した。が、書いてあるのは唯（たつた）十二三行しかないので、直ぐに読終へて了ふ。と繰返して再（また）読み出す。再読終へて再読み出す。恁うして渠は、ものの三十遍も同じ事を続けた。

初は、余念の起るのを妨げようと、凝然（ぢつ）と眉間（みけん）に皺

を寄せて苦い顔をしながら読んで居たが、十遍、二十遍と繰返してるうちに、何時しか気も落着いて来て眉が開く。渠は腕組をして、一向（ひたすら）に他の事を思ふまいと、詩の事許りに心を集めて居たが、それでも時々、ピクリピクリと痙攣（ひきつけ）が顔に現れる。

軈（やが）て鉄筆（ペン）を取上げた。幾度か口の中で云つて見て、頭を捻つたり、眉を寄せたりしてから、「人祖この世に罪を得て、」と云ふ句を亜（つ）いで、

人の子枕す時もなし。

ああ、

と書いたが、此「ああ」の次が出て来ない。で、渠は

思出した様に煙草に火をつけたが、不図次の句が頭脳に浮んだので、口元を歪めて幽かに笑つた。

　ああ、み怒りの雲の色、
　審判（さばき）の日こそ忍ばるれ。

と、手早く書きつけて、鉄筆（ペン）を擱いた。この後は甚麼（どんな）事を書けばよいのか、まだ考へて居ないのだ。で、渠は火鉢に向直つて、頭（かしら）だけ捻つて、書いただけを読返して見る。二三遍全体を読んで見て、今度は目を瞑（つぶ）つて今書いた三行を心で誦（ず）し出した。

「人の子枕す時もなし、ああみ怒り……審判（さばき）の日……。」「人の子枕す……」然うだ、実際だ。人の子は枕

する時もない。人の子は枕する時もない。世界十幾億の人間、男も、女も、真実だ。人の子は枕する時もない。実際然うだ。寝ても不安、起きても不安！　夢の無い眠を得る人が一人でもあらうか！　金を持てば持つたで悪い事を、腹が減れば減つたで悪い事を、噫、寝てさへも、寝てさへも、実際だ、夢の中でさへも悪い事を！　夢の中でさへも俺は、噫、俺は、俺は、俺は…………

　恐ろしい苦悶が地震の様に忽ち其顔に拡がつた。それが刻一刻に深くなつて行く。瞬一瞬に烈しくなつて行く。見ろ、見ろ、人の顔ぢやない。全く人の顔ぢや

ない。鬼？　鬼の顔とは全くだ。種々(いろん)な事が胸に持上がつて来る。渠はそれと戦つて居る。思出すまいと戦つて居る。幾何(いくら)圧しつけても持上がる。あれもこれも持上がる。終には幾十幾百幾千の事が皆一時に持上がる。渠は一生懸命それと戦つて居る。戦つて戦つて、刻一刻に敗けて行く。瞬一瞬に敗けて行く。

「俺は親不孝者だ！」と云ふ考へが、遂に渠を征服した。胸の中で「一円五十銭！」と叫ぶ。脅喝、詐偽、姦通、強姦、喰逃……二十も三十も一時に喊声をあげて頭脳(あたま)を蹂躙(ふみにじ)る。見まい、聞くまい、思出すまいと、渠は矢庭に机の上の『創世乃巻』に突伏した。それで

も見える、母の顔が見える。胸の中で誰やら「貴様は罪人だ。」と叫ぶ、「警察へ行け。」と喚く。と渠は、横浜で唯十（たつた）銭持つて煙草買ひに行つた時、二度三度呼んでも、誰も店に出て来なかつたので、突然「敷島」を三つ浚（さら）つて遁げた事を思出した。渠はキリキリと歯を喰しばつた。噫、俺は一日として、俺は何処へ行つても、俺は、俺は……と思ふと、凄じい髭面が目の前に出た。それは渠が釧路へ来て泊る所のなかつた時、三晩一緒に暮した乞食だ。知人岬（しりとさき）の神社に寝た乞食だ。俺はアノ乞食の嬶を二度姦した！　乞食の嬶を、この髭面の嬶を……髭面がサツと朱を帯びた。カインの顔

だ。アダムの子のカインの顔だ。何処へ逃げても御空(おそら)から大きな眼(まなこ)に睨められたカインの顔だ。土穴を掘つて隠れても大きな眼に睨められたカインの顔だ。噫、カインだ、カインだ、俺はカインだ！

俺はカインだ！　と総身に力を入れて、両手に机の縁を攫んで、突然(いきなり)身を反らした。歯を喰しばつて、堅く堅く目を閉ぢて、頭が自づと後に垂れる。胸の中が掻裂(かつさ)かれる様で、スーツと深く息を吸ふと、パツと目があいた。と、空から見下す大きな眼！　洋燈の真上に径二尺、真黒な天井に円く描かれた大きな眼！「俺はツ」と渠は声を絞つた。

「ウウ」と声がしたので、電気に打たれた様に、全身の毛を逆立てた。渠の声が高かつたので、佐久間が夢の中で唸つたのだ。渠は恐ろしき物を見る様に佐久間の寝顔を凝視めた。眠れりとも、覚めたりともつかぬ、半ば開いた其眼！　其眼の奥から、誰かしら自分を見て居る。誰かしら自分を見て居る。…………

　野村はモウ耐らなくなつて、突然立上つた。「俺は罪人だ、神様！」と心で叫んで居る。襖を開けたも知らぬ。長火鉢に躓いたも知らぬ。真暗で誰のだか解らぬが、兎に角下駄らしいものを足に突懸けて、渠は戸外へ飛出した。

西寺の横の坂を、側目（わきめ）も振らず上つて行く。胸の上に堅く組合せた拳（こぶし）の上に、冷い冷い涙が、頰を伝つてポタリポタリと落つる。「神様、神様。」と心は続け様に叫んで居る。坂の上に鋼鉄色（はがねいろ）の空を劃（かぎ）つた教会の屋根から、今しも登りかけた許りの二十日許りの月が、帽子も冠らぬ渠の頭を斜めに掠めて、後に長い長い影を曳いた。

十二時半頃であつた。

寝る前の平生（いつも）の癖で、竹山は窓を開けて、暖炉の火

気に欝した室内の空気を入代へて居た。※（げき）［＃「門＜嗅のつくり」、99-下-14］とした夜半の街々、片割月（かたわれづき）が雪を殊更寒く見せて、波の音が遠い処でゴウゴウと鳴つて居る。

　直ぐ目の下の病院の窓が一つ、パツと火光（あかり）が射して、白い窓掛（カーテン）に女の影が映つた。其影が、右に動き、左に動き、手をあげたり、屈んだり、消えて又映る。病人が悪くなつたのだらうと思つて見て居た。

　と、真砂町へ抜ける四角（よつかど）から、黒い影が現れた。ブラリブラリと俛首（うなだ）れて歩いて来る。竹山は凝（じつ）と月影に透して視て居たが、怎（どう）も野村らしい。帽子も冠つて居

ず、首巻も巻いて居ない。

其男は、火光の射した窓の前まで来ると、遽(には)かに足を留めた。女の影がまた瞬時(しばらく)窓掛に映つた。

男は、足音を忍ばせて、其窓に近づいた。息を殺して中を覗つてるらしい。竹山も息を殺してそれを見下して居た。

一分も経つたかと思ふと、また女の影が映つて、それが小さくなつたと見ると、ガタリと窓が鳴つた。と、男は強い弾機(ばね)に弾かれた様に、五六歩窓側(まどぎは)を飛び退(すさ)つた。「呀ツ」と云ふ女の声が聞えて、間もなく火光がパツと消えた。窓を開けようとして、戸外(そと)の足音に驚い

たものらしい。
　男は、前よりも俛首（うなだ）れて、空気まで凍つた様な街路（みち）を、ブラリブラリと小さい影を曳いて、洲崎町［＃「洲崎町」は底本では「州崎町」］の方へ去つた。

　翌日、野村良吉が社に出たのは十時少し過であつた。ピクリピクリと痙攣が時々顔を襲うて、常よりも一層沈んで見えた。冷たい疲労の圧迫が、重くも頭脳（あたま）に被さつて居る。胸の底の底の、ズツト底の方で、誰やら泣いて居る様な気がする。何の為に泣くとも解らない

が、何れ（いづ）誰やら泣いて居る気がする。
気が抜けた様に懵乎（ぼうっ）として編輯局に入ると、主筆と竹山と、モ一人の洋服を着た見知らぬ男が、暖炉を取囲（とりま）いて、竹山が何か調子よく話して居た。
　野村が其暖炉に近づいた時、見知らぬ男が立つて礼をした。渠も直ぐ礼を返したが、少し周章気味（あわてぎみ）になつてチラリと其男を見た。二十六七の、少し吊つた眼に才気の輝いた、皮膚（はだ）滑らかに苦味走つた顔。
『これは野村新川君です。』と主筆は腰かけた儘で云つた。そして渠の方を向いて、『この方は今日から入社する事になつた田川勇介君です。』

渠は電光の如く主筆の顔を盗視（ぬすみみ）たが、大きな氷の塊にドシリと頭を撃たれた心地。

『ハア然うですか。』と挨拶はしたもの丶、総身の血が何処か一処（ひとところ）に塊（かたま）つて了つた様で、右の手と左の手が交る〳〵に一度宛、発作的にビクリと動いた。色を変へた顔を上げる勇気もない。

『アノ人は面白い人でして、得意な論題でも見つかると、屹度先づ給仕を酒買にやるんです。冷酒を呷（あふ）りながら論文を書くなんか、アノ温厚（おとなし）い人格に比して怎やら奇蹟の感があるですな。』と、田川と呼ばれた男が談（かた）り出した。誰の事とも野村には解らぬが、何れ何処か

の新聞に居た人の話らしい。

『然う然う、其麽(そんな)癖がありましたね。一体一寸々々(ちよいちよい)奇抜な事をやり出す人なんで、書く物も然うでしたよ。恁麽(こんな)下らん事をと思つてると、時々素的な奴を書出すんですから。』と竹山が相槌を打つ。

『那麽(ああ)いふ男は、今の時世ぢや全く珍しい。』と主筆が鷹揚に嘴を容(はさ)んだ。『アレでも若い時分は随分やつたもので、私の県で自由民権の論を唱導し出したのは、全くアノ男と何とか云ふモ一人の男なんです。学問があり演説は巧し、剰(おまけ)に金があると来てるから、宛然(まるで)火の玉の様に転げ歩いて、熱心な遊説をやつたもんだが、

七八万の財産が国会開会以前(まへ)に一文も無くなつたとか云ふ事だつた。』

『全く惜しい人です喃(なあ)、函館みたいな俗界に置くには。』と田川は至極感に打たれたと云ふ口吻(くちぶり)。

　野村は遂々(たうたう)恁麼話に耐(こら)へ切れなくなつて、其室を出た。事務室を下りて暖炉にあたると、受付の広田が「貴方(あんた)新しい足袋だ喃。俺ンのもモウ恁麼になつた。」と自分の破けた足袋を撫でた。工場にも行つて見た。活字を選り分ける女工の手の敏捷(すばしこ)さを、解版台の傍に立つて見惚(みと)れて居ると、「貴方は気が多い方ですな。」と職長の筒井に背を叩かれた。文選の小僧共はまだ原

稿が下りないので、阿弥陀籤をやつてお菓子を買はうと云ふ相談をして居て、自分を見ると、「野村さんにも加担(かた)ツて貰ふべか。」と云つた。機械場には未だ誰も来て居ない。此頃着いた許りの、新しい三十二面刷の印刷機(ロール)には、白い布が被(か)けてあつた。便所(はばかり)へ行く時小使室の前を通ると、昨日まで居た筈の、横着者の爺(おやぢ)でなく、予(かね)て噂のあつた如く代へられたと見えて、三十五六の小造りの男が頻りに洋燈掃除をして居た。嗚呼アノ爺も罷めさせられた、と思ふと、渠は云ふに云はれぬ悪寒を感じた。何処へ行つても恐ろしい怖ろしい不安が渠に跟(つ)いて来る。胸の中には絶望の声——「今

度こそ真当(ほんたう)の代人(かはり)が来た。汝(きさま)の運命は今日限りだ！
アト五時間だ、イヤ三時間だ、二時間だ、一時間だツ！」
上島に逢へば此消息を話して貰へる様な気がする。
上島は正直な男だ、と考へて、二度目に二階へ上る時、
『上島君はまだ来ないのか、君？』
と広田に聞いて見た。
『モウ先刻(さつき)に来て先刻に出て行きましたよ。』
と答へた。然うだ、十時半だもの、俺も外交に出なけやならんのだ、と思つたが、出て行く所の話ぢやない。
編輯局に入ると、主筆が椅子から立ちかけて、
『それぢや田川君、私はこれから一寸社長の宅に行き

ますから、君も何なら一緒に行つて顔出しゝて来たら怎(どう)です？』

『ア然うですか、ぢや何卒(どうか)伴(つ)れてつて頂きます。』と田川も立つた。二人は出て行く。野村も直ぐ後から出て、応接室との間の狭い廊下の、突当りの窓へ行つた。モウ決つてる！　決つてる！　嗚呼俺は今日限りだ！

　明日から怎(どう)しよう、何処へ行かう、などと云ふ考へを起す余裕もない。「今日限り！」と云ふ事だけが頭脳にも胸にも一杯になつて居て、モウ張裂けさうだ。兎毛(うのけ)一本で突く程の刺戟にも、忽ち頭蓋骨が真二つに

破れさうだ。

　また編輯局に入つた。竹山が唯一人、凝然（じつ）と椅子に凭れて新聞を読んで居る。一分、二分、……五分！　何といふ長い時間だらう。何といふ恐ろしい沈黙だらう。渠は腰かけても見た、立つても見た、新聞を取つても見た、火箸で暖炉の中を掻廻しても見た。窓際に行つても見た。竹山は凝然（じつ）と新聞を読んで居る。

『竹山さん。』と、遂々（たうたう）耐（こら）へきれなくなつて渠は云つた。悲し気な眼で対手を見ながら、顫ひを帯びて怖々（おづおづ）した声で。

　竹山は何気なく顔を上げた。

『アノ!、一寸応接室へ行って頂く訳に、まゐりませんでせうかねす?』

『え? 何か用ですか、秘密の?』

『ハア、其、一寸其……。』と目を落す。

『此室(ここ)にも誰も居ないが。』

『若し誰か入って来ると……。』

『然うですか。』と竹山は立った。

入口で竹山を先に出して、後に跟(つ)いて狭い廊下を三歩か四歩、応接室に入ると、渠は静かに扉(ドア)を閉めた。

割合に広くて、火の気一つ無い空気が水の様だ。壁も天井も純白で、真夜中に吸込んだ寒さが、指で圧し

てもスウと腹まで伝りさうに冷たく見える。青唐草の被帛（おほひ）をかけた円卓子（まるテイブル）が中央に、窓寄りの暖炉の周囲には、皮張りの椅子が三四脚。

竹山は先づ腰を下した。渠は卓子に左の手をかけて、立つた儘霎時（しばらく）火の無い暖炉を見て居たが、

『甚麽（どんな）事件です？』

と竹山に訊かれると、忽ち目を自分の足下に落して、

『甚麽事件と云つて、何、其、外ぢやないんですがねす。』

『ハア。』

『アノ、』と云つたが、此時渠は不意に、自分の考へて

居る事は杞憂に過ぎんのぢやないかと云ふ気がした。が『実は其、（と再一寸口を噤んで、）私は今日限り罷めさせられるのぢやないかと思ひますが……』と云つて、妙な笑を口元に漂はしながら竹山の顔を見た。

竹山の眼には機敏な観察力が、瞬く間閃いた。『今日限り？　それは又怎してです？』

『でも、』と渠は再目を落した。『でも、モウお決めになつてるんぢやないかと、私は思ひますがねす。』

『僕にはまだ、何の話も無いんですがね。』

『ハア？』と云ふなり、渠は胡散臭い目付をしてチラリと対手の顔を見た。白ツぱくれてるのだとは直ぐ解

つたけれど、また何処かしら、話が無いと云つて貰つたのが有難い様な気もする。

暫らく黙つて居たが、『アノ、田川さんといふ人は、今度初めて釧路へ来られたのですかねす？』

『然うです。』と云つて竹山は注意深く渠の顔色を窺つた。

『今迄何処に居た人でせうか？』

『函館の新聞に居た男です。』

『ハア。』と聞えぬ程低く云つたが、霎時して又、『二面の方ですか、三面の方ですか？』

『何方もやる男です。筆も兎に角立つし、外交も仲々

抜目のない方だし……。』

『ハア。』と再（また）低い声。『で今後（これから）は？』

『サア、それは未だ決めてないんだが、僕の考へぢやマア、遊軍と云つた様な所が可いかと思つてるがね。』

渠は心が頻りに苛々（いらいら）してるけれど、竹山の存外平気な物言ひに、取つて掛る機会（しほ）がないのだ。一分許り話は断えた。

『アノ、』と渠は再び顔をあげた。『ですけれども、アノ方が来たから私に用がなくなつたんぢやないですかねす？』

『其麼（そんな）訳は無いでせう。僕はまだ、モ一人位入れよう

かと思つてる位だ。』

『ハ？』と野村は、飲込めぬと云つた様な眼付をする。

『僕は、五月の総選挙以前に六頁に拡張しようと考へてるんだが、社長初め、別段不賛成が無い様だ。過般（こなひだ）見積書も作つて見たんだがね。六頁にして、帯広のアノ新聞を買つて了つて、釧路十勝二ヶ国を勢力範囲にしようと云ふんだ。』

『ハア、然うですかねす。』

『然うなると君、帯広支社にだつて二人位記者を置かなくちやならんからな。』

渠の頭脳（あたま）は非常に混雑して来た。嗚呼、俺は罷めさ

せられるには違ひないんだ。だが、竹山の云つてる処も道理だ。成程然うなれば、まだ一人も二人も人が要る。だが、だが、ハテナ、一体社の拡張と俺と、甚麼関係になつてるか知ら？　六頁になつて……釧路十勝二ケ国を……帯広に支社を置いて……田川が此方に居るとすると俺は要らなくなるし……田川が帯広に行くと、然うすると俺も帯広にやられるか知ら……ハテナ……恁うと……それはまだ後の事だが……今日は怎か知ら、今日は？……

『だがね、君。』と、稍あつてから低めた調子で竹山が云つた時、其声は渠の混雑した心に異様に響いて、「矢

張今日限りだ」といふ考へが征矢（そや）の如く閃いた。

『だがね、君、僕は率直に云ふが、』と竹山は声を落して眼を外らした。『主筆には君に対して余り好い感情を有（も）つてない様な口吻が、時々見えぬでも無い。……』

　ソラ来た！　と思ふと、渠は冷水を浴びた様な気がして、腋の下から汗がタラタラと流れ出した。と同時に、怎やら頭の中の熱が一時颯（さつ）と引いた様で、急に気がスツキリとする。凝（じつ）と目を据ゑて竹山を見た。

『今朝、小宮洋服店の主人が主筆ン所（とこ）へ行つたさうだがね。』

『何と云つて行きました？』と不思（おもはず）。

『サア、田川が居たから詳しい話も聞かなかつたが……。』竹山は口を噤(つぐ)んで渠の顔を見た。

『竹山さん、私は、』と哀し気な顫声(ふるひごゑ)を絞つた。『私はモウ何処へも行く所のない男です。種々(いろん)な事をやつて来ました。そして方々歩いて来ました。そして、私はモウ行く所がありません。罷めさせられると其限(それつきり)です。罷めさせられると死にます。死ぬ許りです。餓ゑて死ぬ許りです。貴君方は餓ゑた事がないでせう。嗚呼、私は何処へ行つても大きな眼(まなこ)に睨められます。眠つてる人も私を視て居ます。そして、』と云つて、ギラギラさして居た目を竹山の顔に据ゑたが、『私は、自

分の職責（しごと）は忠実（まじめ）にやってる積りです。毎日出来るだけ忠実（まじめ）にやってる積りです。毎晩町を歩いて、材料（たね）があるかあるかと、それ許り心懸けて居ります。そして、昨夜も遅くまで、』と急に句を切って、堅く口を結んだ。

『然う昨夜（ゆうべ）も、』と竹山は呟く様に云ったが、ニヤニヤと妙な笑を見せて、『病院の窓は、怎うでした？』

野村はタヂタヂと二三歩後退（あとじさ）った。噫、病院の窓！梅野とモ一人の看護婦が、寝衣（ねまき）に着換へて淡紅色（ときいろ）の扱帯（しごき）をしてた所で、足下（あしもと）には燃える様な赤い裏を引覆（ひっくらか）へした、まだ身の温（ぬく）りのありさうな衣服（きもの）！そして、白い脛が！白い脛が！

見開いた眼には何も見えぬ。口は蟇(がま)の様に開けた儘、ピクリピクリと顔一体が痙攣(ひきつ)けて両側(りやうわき)で不恰好に汗を握つた拳がブルブル顫へて居る。

「神様、神様。」と、何処か心の隅の隅の、ズツと隅の方で………。

（五月二十六日脱稿）

〔生前未発表・明治四十一年五月稿〕

底本：「石川啄木全集　第三巻　小説」筑摩書房
１９７８（昭和53）年10月25日初版第１刷発行
１９９３（平成５年）年５月20日初版第７刷発行
※生前未発表、１９０８（明治41）年５月執筆のこの作品の本文を、底本は、土岐善麿氏所蔵啄木自筆原稿によっています。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、103-下-18と104-上-5の「釧路十勝二ヶ国」をのぞいて、大振りにつくっています。
※「擲揄（からか）つた」と「揄擲（からか）つて」の混在は、底本通りです。

入力：Nana ohbe
校正：川山隆
２００８年10月８日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。